

文献による中国の家庭教育に関する一考察

翁 麗霞・神川 康子

A Study of Chinese Education in the Home based on Literature

LiXia WENG, Yasuko KAMIKAWA

キーワード：社会学，学校教育，地域社会，家庭教育，中国

keywords：Sociology, Education at school, Community, Education in the home, China

I. はじめに

家庭教育は古くて新しいテーマであり、古くは、人類が誕生し、家族が成立するとともに家庭教育が生まれたと言える。家庭教育の内容は社会の変遷によって変化し、現代社会では少子化も進展し、これまでとは異なった家庭教育の様相がみられる。

中国における従来の家庭教育研究は、教育学、心理学、医学の領域で行われるものが相対的に多かった。一方、社会学的観点から行われる研究は比較的少なく、特にこの方面での研究は、これまでのさまざまな事実や経験等についてまとめたものが多く、諸事実の現象的把握にとどまり、事実を通してその意味を本質的に探求することが少ない。

本論文は、先行研究の諸見解に学びながら、家庭教育の本質を確認し、現代中国社会における家庭教育の現状と問題点を明らかにすることを目的とする。これにより家庭教育のあるべき姿の探求にあたっての序論とする。

家庭教育は、社会教育、学校教育、家庭教育から成り立つ教育体系の中で、重要な位置を占めている。中国における家庭教育は、中国の「社会転換期」における変化に応じて、その本来の役割を果たしてきたと考えられる。改革の目標を達成するには、中国家庭教育の実状にもとづいて、現代社会の要請に応じつつ、その本来の役割を果たすことができるような新たな方法を追求しなければならないと考える。このような新たな家庭教育の樹立は、その前提として、中国の家庭教育の歴史と現状、特に現在直面している、調和ある社会における中国家庭教育問題を具体的に把握し、その背景要因を深く分析して、はじめて成されるものである。

II. 家庭教育研究の意義及び社会学の視点

(1) 理論的意義

家庭教育は、中国において行われる諸事業の基礎的活動であり、家庭は人材育成のゆりかごであると言える。なぜなら、それは子どもの成長に関係しているだけでなく、国家の未来にまで影響を及ぼすからである。家庭教育は教育学、社会学、心理学、倫理学など数多くの分野と関連し、それらを総合する分野でもある。そして、それ自体固有の特徴と規律を備えている。社会学の分野において、家庭教育をめぐる学問の系統は複雑な有機的総体でありながら、社会の中での1つの独立した系統でもある。

社会学系統には、政治、文化、経済、教育、体育、文芸などの系統があり、教育学系統と他の系統の間には、一種の動態的な依存関係が存在している。

そこで我々は、現在ある学校にのみ目を向けることだけでは不十分となった。家庭教育は学校教育にとって不可分の基礎部分であり、学校教育の範疇外の数多くの要因が、今まさに子どもの教育に影響を及ぼしている。

しかし中国では、家庭生活論に着目し研究を行っているものはまだ数少なく、それゆえ社会学の視点による家庭教育理論の研究を展開させる必要があり、これをもって、今日の家庭教育の発展及び社会発展の要請に応じることができる。中国の家庭教育の理論を作り上げるには、中国に適応した、つまり中国社会において調和的かつ最も有効性をもつ家庭教育理論を確立することが急務の課題となっている。

(2) 現実的意義

中共中央、国务院官房は『小、中、高の徳育活動のさらに一歩進んだ強化と改善に対する提議』（中共中央官房発行〔200028号〕）の中で、「家庭教育の

指導と管理を強化、改善し、家庭教育に関心を持ち、それらを支持し、教育行政部門は家庭教育の組織と指導の責任感を負わなければならない。また、各級組合、共産党、青年団、婦連などの団体は、豊富で、多彩な家庭教育活動を行う必要がある。」「多様な教育方式を通し、家庭教育の知識を普及させ、的確な人材観、育成観および教育思想を樹立させること、また科学的な教育方法を把握させることに手助けをしなければならない。」と明確に指摘している。¹⁾

家族は、今日の社会においての最も基本的な単位であり、両親は子どもの第一の教師であって、家庭教育は子どもが全人的な成長を遂げる基礎となるものである。人の成長過程は、極めて複雑な過程であり、学校、家庭、社会の三者の影響が同時に関与し、存在する。後代への教育は家庭の責任だけではなく、社会の一連の事業の責任でもある。家庭教育は全民族の文化、科学レベルや政治資質の向上にとって緊迫した課題であり、同時にまた家庭教育レベルの向上にもなる。それゆえ、家庭教育を研究することは、重大な現実的意義をもっている。家庭生活論の視点による家庭教育理論を研究し、いくつかの的を得た意見を提供することが本研究の意義である。

筆者は本課題の研究が家庭教育活動のために、いくらかの有益な啓発を必ずや提供できると信じている。

III. 本研究の目的、性格、内容と方法

(1) 研究目的

本研究の目的は、先人による家庭教育基礎理論の総括であり、これまでの統計諸資料を参考とし、今日までの中国の家庭教育の現状に対する分析と実証考察を通し、家庭教育に関する教訓と啓発すべき内容を探り出すことである。そして現代の家庭教育を可能な限りの確かな状況にまで向上させるために、社会学的視野から新たな提案と啓示を行う。

(2) 研究の性格

研究の性格は、中国家庭教育の研究範疇に属し、家庭教育は社会学の中の婚姻家庭社会学研究の範疇にあり、家族の人間関係はその研究の重要な内容の一つである。

前述のごとく、家庭教育学は社会学の分野の一つであり、教育学と社会学両方の性格をもつ分野の一つでもある。

彭立栄氏は『家庭教育学』の本の中で、以下のよう述べている。「家庭教育学は社会学的性質をもっており、特に、婚姻を基盤とした家庭教育学の性格をもっている。教育学の性格を持ちつつ、教育学の一分野に属しているのである。つまり家庭教育学は社会学の特徴と性格を備えている。また、教育学と社会学は社会科学の領域において、異なった分野に属しており、このことは、家庭教育は境界的な学問性と総合性という科学的特徴を備えているということを決定的にしている」²⁾。家庭教育が境界領域の科学の特質を持っていることによって、家庭教育の範疇のみならず、教育や社会学とも密接な関係を持ち、多領域に関わる学問的性格が、本論文の特徴である。

(3) 研究内容と方法

いかなる研究目的の実現も、すべて一定の研究手法からはずれることはできない。なぜなら、適切な研究方法を選ぶことができるか否かによって、直接研究の結果にまで影響してくるからである。

家庭教育の方法は、家庭教育現象を認識することであり、家庭教育における規律、手段、方式等を探索することである。そして、家庭教育科学研究の方法論は、具体的な科学研究方法を対象とすべきであり、各種の具体的方法の共通性と基本的な規律が構成する理論体系を取り入れることは、家庭教育研究の方向、範式、効果を決定づけ、制約することになる。筆者は家庭教育研究においては、歴史的方法、総合的方法、実践的方法、そして弁証的方法をあくまで守り通すべきだということを主張する。

IV. 家族及び家庭教育の機能

家庭教育問題に対し、我々はまず「家族」という問題から研究を行うべきである。人々は幼年期から老年期に至る過程において、家族の周期がどのように変化するにかかわらず、人々は家族とは切っても切り離せない関係がある。いかなる、家族も一定の社会的背景のもとに置かれており、社会の制度と規範と環境要素の影響と制約を受け、家族の機能、性格、形式と構造は、それらと呼应して変化が生まれている。同時に、家族構成と形式の変動、機能と役割の遂行は、言い換えれば、社会の強固さと発展に大きく影響しているのである。

社会とは家族の集まりにより組成されており、また家族は、つねに社会と密接な関係がある。家族は、

社会の枠から外れ独立的に存在することは不可能であり、それは社会全体と社会組織とともに多種多様の関係を発生させることとなる。また家族制度はその他の社会制度と同様に人類社会の生活活動の規範体系を構成している。人々は家族から社会へ出て行くが、やはり個人は家族の影響を受けており、同時に個人も家族に影響を与えている。これらがすべて同じ程度で、相互的に影響し合っているということではないが、個人は家族と切っても切り離せない関係にある。では、結局、家族とは一体何なのか。まず、家族の概念とは何かを見ていく。

(1) 家族とは

J. Roos Asherman 氏は『家族指導論』の本の中で、家族的観点を持つ、異なった分野を総括し、各種研究の有機的關係を列挙した。

日本人の家族関係に関する研究者、森岡清美氏と望月嵩氏は、家族に対し、次のような定義を下している。「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的包絡で結ばれた、第1次的な福祉追求の集団である」。³⁾ この定義は、家族は血縁と夫婦の縁に基礎をおく一種の関係にある親族により組織されており、同時にその中の個人関係は、深く厚い感情要素などを含んでいる。彼らは、「第1次的な福祉追求の集団である」という論調を通し、家族は社会の細胞であり、人類の生活の基本的な組織形式であると指摘した。家族は社会の最も基本的な単位であり、出生後最初に接する環境である。また接触時間が多い社会単位も最初は家族である。それゆえ、家族の好し悪しは、直接的に家族構成員の家庭に対する理解と把握能力が、社会生活の総体にまで関係してくる。家族が発生して以来、この最小の社会組織である家族は、当然のことながら子どもを教育する責任を負うことになったのである。

家族の形態面について、森岡清美氏と望月嵩氏の見解では、「居住関係を持つ親族の核は、夫婦・親子・きょうだいといった近親者である。このうち、夫婦関係が基礎となるとしている。そこから親子関係が発生し、さらにきょうだい関係が派生する。両性を含むのみならず、異なる性の少なくとも1組の者が夫婦関係にあることを与件とする集団、あるいは異なる世代・年齢階級を含むばかりか、中核的な成員が親子・きょうだいの関係で結ばれていることを与件とする集団は、家族のほかにはない。」と解

説している。⁴⁾

(2) 教育の機能

リントン氏(1949年)は、核家族について「持久的異性愛関係は、先天的・遺伝的な肉体関係と心理的な需要のもとに形成されている」と述べている。『家族は変革かそれとも続くか』という本の中で、次のように述べている。(1) 頻繁な性行為と男による支配、即ち男子は、自己のために特定の婦女を所有することができ、それらの婦女が他の相手と、一晚を明かすというような行為を阻止することができるという支配権である、(2) 認知された個人的関係の中にある安心感と同一家族において支えあう伴侶性を維持するという基本的な相互需要関係、(3) 安定的配偶者が存在することによって、男性は母親が子どもの面倒を見るという依頼性が保証できるためである。⁵⁾ また、飯田哲也氏は、マードック及びパーソンズについて次のように紹介している。「1949年に出版されたマードックの『社会構造』は、250の現存未開社会についての実証的資料を用いて、核家族論を主張し、そのことを通して原始集団婚説を否定するという性格のものである。マードックの見解の核心は、核家族の普遍性および核家族の機能の二つの主張であるといえる。」⁶⁾ 家族は出産、子育て、扶養、消費、休憩、娯楽等の多種類の機能を担っている。つまり、子どもに対して、ただ「出産」の問題だけではなく、「養育」、「教育」の問題も負担していることにほかならない。

台湾の高樹貴氏は『家庭社会学』の本の中で、「家庭教育の諸機能は、生物的機能、社会的機能、心理的機能、保護的機能、経済的機能、宗教的機能、娯楽的機能である」と指摘している。高樹貴の教育的機能に対する理解は、前述の7大機能以上のものになっており、また「家族の教育的機能は、家族構成員に対して、その一員としての職責をまっとうできるかどうかに関係しており、家庭の各種機能を均等に、十分に発揮させるかどうかに関連している」⁷⁾と述べている。

社会学の視点から見ると、人類社会の多元的分析は重視しなければならない。家族は数々の機能を持っており、その中には、男女の性生活の願望を満足させる機能、及び物質を生産する機能も持っており、同時にまた、休息的、娯乐的、そして消費的機能、さらには、老人を保護する機能も持ち備えている。人類社会の生産は、物質の生産と人類の生産により

構成されており、この2つの生産は、人類社会の存在と発展の基本的条件であり、1つも欠けてはならない。人は子どもを生育するだけではいけない。なぜなら、人類の生産作用は、今だ完結しておらず、彼らを生活の条件に適應させ、独立生活の能力を把握させ、そのために教育を行う必要があるのである。このことからわかるように、物質の再生産と人口の再生産は、家族の二大基本機能なのである。

V. 家庭教育とは何か

家庭教育とは何か？家庭教育とは、社会教育、学校教育そして家庭教育によって、構成された全社会教育体系の中の重要な構成部分の1つである。その独自の機能は、学校教育も社会教育によっても取って替わることができないものである。このことから、我々は、家庭教育はマクロ的なプロジェクトであるということが言える。

19世紀ドイツの幼時教育家フレーベルは、かつて「国家の運命は政權の座にあるというよりも、母親の手の中にあるという方が適切である。」と言いつ残している。中国は悠久な歴史をもつ文明国家であり、古代から家庭教育の良的且つ伝統的な教を重視してきた。古代と近代の家庭教育についての著作の中には、『家範』『家教』等の書籍がある。趙忠心氏による「『中国双書総録』の記載によれば、それらは、中国の古代にすでに公開出版されている。『家訓』は合計120種類以上あり、その分布状況は、南北朝1部、唐朝2部、宋朝20部、元朝4部、明朝30部、清朝61部、民国初年4部である。⁸⁾

中国の古代がこのように家庭教育を重視していることに応じて著述も多く、このことは世界教育史上においても、極めて稀なことである。

(1) 家庭教育の概念

家庭教育は中国古代から歴然と存在しているが、家庭教育とは何なのか、どのようにそれを理解していけばよいか、家庭教育の概念をどのように定めるのかなどについては、各時代の制約により、確定的な定義はなく、現在に至るまで一貫した見解はない。

台湾の王連生氏は、「家庭教育は狭義的な家庭教育でありながら、広義的な家庭教育でもある」と述べている。狭義の家庭教育とは就学前乳幼児が家族において受ける教育であり、即ち父母が子どもに対して行う生活の指導、そして、道徳觀念の養成であ

る。彼の広義的な家庭教育の解釈は「人間は生を受けてから死に至るまで、家庭環境やその構成員やその雰囲気による直接的な、或いは間接的な影響を受け、倫理觀念の養成、道徳行為の形成において、身心の健全たる発展の指導効益を獲得する。」⁹⁾という点に特徴がある。

山下俊郎氏は『家庭教育』の本の中で、次のように論じている。「家庭教育というのは、いうまでもなく家庭における教育である。」「家庭教育は、家庭における親子関係を軸として、織り出されるものであると云ってよい。ある意味においては、親子関係の中に行われる意図的調整が、家庭教育であるともいえるであろう。」¹⁰⁾と指摘している。

山下俊郎氏が強調するのは、主に父母或いは年長者の児童に対する教育であり、家庭教育の親子関係の相互作用を持つ関係に注意を払っていなかったと考える。上述の教育家は家庭教育の解釈或いは定義について、一つの側面からのみ家庭教育を説明しているにすぎないと思われる。

彭立栄氏は『家庭教育学』の本の中で、「家庭教育とは、年長者がその年少者に対し行う教育のことをいう。未成年子女を持つ各家庭は、未成年や孫、孫娘に対し、家庭教育を行う責任と義務を受け持っている。家庭教育について、一般的に言うと、父母がその子女に対し教育を行う責任と義務は、さらに直接的であり際立っている。」と指摘している。¹¹⁾

趙忠心氏は新中国成立後、初の家庭教育に関する学術的著作である『家庭教育学』の本の中で、中国の特色ある家庭教育理論体系の樹立を目指して、古今東西の家庭教育理論の研究成果を広範に参考にして、保護者が子どもに教育する実践の経験を吸収する上での家庭教育の概念を提出している。彼は『家庭教育学』という著書の中で、次のように論じている。「家庭教育とは何か？伝統的な言い方によると、家庭教育とは、家庭生活の中で、保護者すなわち家庭の中の年長者（その中で主たるのは父母）による、その子ども及び他の年少者に実施する教育と影響のことである。実際、これは狭義の家庭教育であり、広義の家庭教育というのは、家族構成員の間で互いに実施する教育である。前に述べたように、すべて目的を持ち、明確な意志を持って、知識と技能を増して、人の思想品性に影響を与え、人の知力と体力の活動を発達させることは、すべて教育である。家庭の中において、父母が子どもにも、子どもが父

母にも、年長者が年少者にも、年少者が年長者にも、目的を持ち、明確な意志を持って、実施することによる影響は、すべて家庭教育である。」¹²⁾。前に示した何名かの学者と違い、彼が強調しているのは、家庭の中において、父母が子どもにも、子どもが父母にも、年長者が年少者にも、年少者が年長者にも、目的を持ち、明確な意志を持って、実施することによる影響は、すべて家庭教育であると述べているように、家庭教育は「上」から「下」への影響だけではなく、「下」から「上」へと作用することによる影響も、また教育であるということである。

筆者は、彼のこの親子関係の間に互いに影響する役割を持つという考えには、基本的には同意するものである。なぜなら、子どもを授かったその日から、父母は子どもへの「教育者」と、子どもから学ぶ「学習者」の2つの役割を担当することになり、父母が子どもを教育する過程においてのその本質は、父母が子どもと共に学び、相互的に学び、共に成長していく過程だからである。伝統的見解に基づくと、家庭教育は家族生活において、家族生活の中の年長者（その内の主なのは父母である）がその子女及びその他幼少者に対し行う教育とその影響を指している。言うまでもなく、ここでのいう家庭教育とは狭義的な家庭教育を指しており、広義的な家庭教育は、家族の構成員の間で相互的に行われる一連の教育影響をさしている。それは、父母が子女に年長者が年少者に対してだけでなく、子女が父母に年少者が年長者に対して、また両親間や子女間、また子女と祖先間の相互影響をも含んでいる。

したがって、現在に至るまでの家庭教育理論に関する研究成果を参照すると、現代家庭教育の概念を以下のようにまとめることができる。現代の家庭教育は、家族の構成員の間で相互的に行われる教育であり、双方向的相互活動教育と影響の過程である。家族に於いて父母が子どもに対し、また子どもが父母に対し、年長者が年少者に対し、また年少者が年長者に対し、それが意識的であるか無意識的であるかにかかわらず、人の知識、知能、体力などを発展させ、人の知識と身体の発育に相互的に影響を及ぼすこと、これらがすべて家庭教育である。

家庭教育は作用と反作用の動態的關係をそなえている。当然、家庭教育は二面性をそなえているという点である。一般的に言えば、年長者が年少者に対し行う教育は、教育の主要な側面であり、ある種の

特殊な状況においては、反対に、年少者が年長者に対し行う教育にも主要な側面へ転化させることができるのである。また、家族の構成員間の相互学習の過程という言い方もできる。

家庭教育は、人の人生を貫いており、それは日常教育でありながら終身教育でもある。家庭教育の内容、形式、機能等は、社会の変遷により発展、変化してきており、家庭教育は、継承性と時代性を反映する特徴をもっている。

(2) 家庭教育の本質

家庭教育は、主に親子関係の問題を焦点として論じられている。我々は、家庭教育の概念だけでなく、家庭教育の本質も理解する必要がある。家庭教育の本質というのは、家庭教育が学校教育と社会教育と区別される独自の性格と特徴である。「国際教育成就評価協会の学前項目」の調査結果が表しているように、正規の幼稚園教育があっても、家庭教育はやはり子どもの発達、特に個性的な発達に重要な役割を果たしているのだから、子どもを立派な人間に成長させるために、家庭教育は確かに名実とともに基礎的教育であると考えられる。

家庭教育の本質的問題を認識する為には、家庭教育の源を探究しなければならない。唯物論の見方によれば、人は誰でも社会の中に存在する。歴史的にみれば、家庭教育が社会の需要によって生まれて、社会の変動とともに変化しているのである。では、どのように社会の需要及び社会の変動によって、社会学の視点から家庭教育の変化過程の動態分析を把握すべきなのであろうか。それは、エンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』の1884年の序文の解釈をめぐる問題にほかならない。「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の規定的要因は、直接的生命の生産と再生産である。しかし、これはそれ自体さらに二通りにわかれる。一方では、生活資料の生産、即ち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖が、これである…」と述べている。¹³⁾

人類社会の生産は、物質資料の生産と人間の生産の2つから成り立っており、この2つは、人類社会の存在と発展の基本的な条件であるという見解が導かれる。この2つの働きは、片方を欠かすことはできない。人々は、子どもを産むだけでは、人間の生産の役割を終えたことにはならない。彼らを生活の条件に適応させ、独立して生活できる能力を身

につけさせなければならない。したがって教育を必要とするのである、ということが分かるとされている。それゆえ、家庭教育の本質問題は、家庭がこの「初等的な集団」の範囲の中で、子どもをどのように「自然人」から「社会人」へと育てるかという教育過程といってもよいであろう。ここで教育の範囲と本質の2つの面に触れている。範囲では、学校教育と社会教育を区別している。本質は、基本的に同じであるが、範囲の中にも家庭教育自身の独自な特徴を持っている。

趙忠心氏は『家庭教育学』の中で、家庭教育と学校教育の区別について、家庭教育の利点、違い、限界性等を論述している。家庭教育と学校教育の区別について、彼は7つの点から論じている。家庭教育の利点については、さらに8つの点から論じ、家庭教育の限界性については3つの点から論じている。¹⁴⁾

趙忠心氏は家庭教育の本質的な問題について、次のように論述している。「家族と学校を比べるなら、勿論家族は構成が簡単であり、規模も小さく、成員の数も少ない。しかし、学校のように専門性を持つ社会集団ではなく、総合性を持つ社会集団であり、多様な働きを持っている。」¹⁵⁾。学校の教育者と被教育者の間には、単純な師弟関係及び社会関係が存在するが、家族の中の教育者と被教育者の間には、教育者と被教育者という関係だけではなく、同時に保護者と子、孫の関係もある。

VI. 家庭生活論の視点から見た家庭教育課題の提起

(1) 社会学の視点による家庭教育に関する研究

現在、中国大陸で生活している人々は、家族内外の二重の衝撃を受けている。これは全社会の改革の波そのものの変化による衝撃である。このような歴史的な変化の中での衝撃を家庭教育も避けることができず、直接的あるいは間接的に衝撃を受けている。家庭教育においても新たな転換が迫られている。

中国社会は社会転換の加速期に直面している。ここでいう「社会転換」(Social Transformation)とは、伝統型社会から現代型社会への転換のことである。すなわち、農業的・農村的、半封鎖的(半封建的)な社会から商工業的・都市的、開放的(近代的)な社会への転換を意味する。とりわけ重要な変化と

しては、経済面における計画経済から市場経済への転換を指摘することができる。

中国では「社会転換」だけではなく、経済体制も全面的な改革開放の方式で進められている。これまでの単一的、伝統的な教育体系は、次第に多元的、現代的な教育体系へと移り変わろうとしている。どのように創造性をもつ人材を育成するかという問題については、単純に学校内の問題だけにとどまっているのでは決してなく、これはすでに社会化した問題になっており、学校教育の中でのみ解決できる問題ではなくなっているのである。

つまり社会学の視点をもって、総合的・系統的な分析を行い、家庭教育を社会問題の一部として、社会現象の各方面においてのそれらの関係と発展について、総合的に研究すべきなのである。筆者は学校教育にのみ重点をおくのではなく、地域や家族、学校教育が結びつき、教育全面にわたる改革を行うべきだと指摘したい。

(2) 家庭生活論の視点から見た家庭教育課題の提起の重要性

改革開放と現代化建設の新時期において、現代化の実現と科学技術はキーワードであり、教育は基礎である。そして、家庭教育は基礎の基礎である。

我々は、児童期の最も重要な教育機関は家族であり、担任教師として、この重要な役割を果たすのは母親である、と考える。知識の氾濫、全世界の共生、人材教育がこの時代と社会が注目する焦点となると、中国は昨今の家庭教育を振り返る必要がある。それとも、科学的、現代的な視点からは、中国では社会学の視点から家庭教育を見るべきではないとも言うのだろうか。

筆者は、雲南大学の学生による殺人事件を典型的な例として、家庭教育の重要性を強調したい意図をもっている。

雲南大学生物工程学科大学4年生の馬嘉爵が、数日のうちに同じ寮に住む同級生4人を殺害するという事件を起こしており、その手段は身の毛もよだつほど残忍で冷酷極まりないものであった。

彼は家族にとって、自慢の子であり、周囲は彼の家族を子女教育の模範と見なしていた。両親、親戚、友人、近所の人々は、彼がこの事件を起こした後でさえも彼に対する印象は変わらず良く、多くの農民達は、4人も人間を殺害したのが馬嘉爵であるということを想像することさえできなかった。しかし、

馬嘉爵は殺害を好み、刑法に触れたこと自体は、結局事実に違いなかったのである。大学の同級生達は、馬嘉爵は過度に自分を卑下し、自分の殻に閉じこもり、偏屈な人間だったと口をそろえる。

馬嘉爵の大学生活は、周辺世界を、現代化されたおしゃれな生活と認識して、周りの裕福で、贅沢な生活をしている同級生達から受ける都市と農村の差の増大、貧富の差の増大を日に日に強く感じ、それゆえ心の中のすべてが益々劣等感で溢れ、益々閉じこもり、益々敏感になっていた。

彼は、社会は彼に対し不公平であると考え、彼を蔑視し、虐げたすべての者を深く恨んでいた。この他にも、馬嘉爵は大学在学中、出費を節約するため、家族にもほとんど電話をすることもなく、手紙を書くこともほとんどなかった。このように親との意志の疎通もほとんどなく、電話の中でも二言三言交わすだけで、自分の考えや思っていることについて触れることもなかった。

馬嘉爵事件は、大学生に対する家庭教育も手を抜いてはならないと我々に警鐘を鳴らしている。家庭教育の能力を向上させることも、今日の中国家庭が直面している急迫した課題である。馬嘉爵事件を通し、我々が改めて考えなければならないのは、子どもが大学に入ったあと、立派な大人になっているかどうか、もう子どもを管理しなくてもよいか、大学生に対しどのようにその青春期の教育を行うか、どのように家庭教育を行うか、そして、どのように育人し、育才するか、また、家庭、学校、地域をどのように結び付けていくかということである。それはまた我々の前に提起された新しい課題でもある。

中国国民であれば、ほとんどの人が記憶にとどめているが、1992年2月、77名の日本人児童と30名の中国人児童、即ち日中青少年が内モンゴルで、草原探検キャンプを行ったことがあった。その活動から、中国の子どもは、野外生存能力と家庭教育において、多くの問題が存在していることが露呈した。

その後、著名な教育専門家の孫雲曉は、『夏のキャンプの挑戦』を発表し、全国を沸き立たせ、全国で教育大討論が巻き起こり、中国の素質教育の過程を促進する役割を果たした。

光陰矢の如し。十何年が過ぎた今、中国の子ども達はどのようなになったのだろうか。遺憾なことに、国際探検夏キャンプ活動は、我々の教育の現状に大きな喚起を引き起こすこともなかった。国民を奮い

立たせ感動させることもなかった。中国の親たちの目を輝かせることもなかった。中国の親たちが今日の子どもを注視する時、我々中国の子どもはやはり弱々しく、少々の事でも耐えられない、そのように人を失望させるばかりの子どものように感じる。2004年8月12日から17日にかけ、内モンゴル自治区の科爾沁右翼中旗において、中国、韓国、日本の国の青少年90名が組織する国際草原探検夏キャンプ活動が行われた。三ヶ国の青少年が三名一組になり、何日間のキャンプ活動の中で、野外で寝泊まりし、炎天下の暑さの中を毎日30キロの道のりを歩いた。その中で随行員は、日本の子ども達は、痩せた体に大きな荷物を背負いながら、誰からの手助けも断り、誰の助けも借りず、歩きつづけた。しかし、中国の子ども達は悲鳴をあげつづけ、携帯電話のベルも鳴り続き、両親に愚痴や苦情などを言い続けていた。

日本と韓国の子どもが、神様がくださったその美しい大草原を目の前にして、感慨を覚えている時、中国の子どもは、感謝と賛賞の気持ちさえ持たず、ただ早く家に帰れることだけを願っていた。国際競争が日に日に激化するに伴い、経済のグローバル化は不断に深まり、科学技術は、日新月异の一途をたどっている。十数年来に渡り、知識ある者は、中国の数多くの弱点を痛感しており、家庭教育の中から生じた養成目標及び教育方式においての種々の問題を痛感している。そして、中華民族の未来と運命を案じている人たちは、我々の次の世代が民族復興の偉業を引き継ぐことができるか、来世紀には、中国が国富民強の歴史的な重役を担えるかどうか知りたいと渴望している。

中、日、韓三国の青少年国際草原探検夏キャンプ活動は再び失敗に終わり、また同時に再び中国の教育問題を浮き彫りにした。最も重要なのは、中国の家族の中で存在する教育問題が暴かれたことである。つまり、実際の所、そこに映し出しているのは、他ならぬ我々父母の家庭教育の失敗である。

我々に欠けているのは、子どもの独立の育成と彼らが他人と協力し合う能力の養成である。生まれつき一つの欠点もない完璧な父母などはどこにもいない。子どもを教育する前に、まず父母を教育することからはじめることが必要で、すなわち、良好な家庭教育を行うためには、まず、良好な父母教育を行うべきなのである。青少年の教育と育成をどのよう

に強化するかは我々全社会がともに直面している共通の課題である。我々は真に心から中国の家庭教育を研究し、中国の父母の家庭教育の水準を上げることが、目の前に迫り、一刻の猶予も許されない状態にあるということを痛感させられている。

(3) 本研究に関する社会学の視点

①記号相互活動理論の観点

子どもが健全に成長し、徳、知、身体、美、労働の多方面で、全面的に発展できる新世代となるため、家庭教育は社会教育、学校教育とうまく釣り合いがとれていなければならない。孫興春氏はこう述べている。「相互活動理論は社会学理論において重要な一部分である。記号相互活動論の代表的人物の1人であるブルモの観点は、記号とは社会相互活動作用における仲介であり、人類は自然環境の中でのみ生活しているのではなく、'記号環境'の中でも生活しているということを認識させるものである。」¹⁶⁾

家族は子どもの第一の学校であり、父母は子どもの第一の先生である。家族構成員の中で、子どもにとって、最も密接な関係にあるのは父母であり、両親の言語と行動は、そのまま子どもの最初の模倣対象となる。家庭教育の過程は、実際、父母と子女が記号を運用して、相互活動を行う過程でもある。孫興春氏の見解では、「父母は一連の記号（言語、動作）を通し、自己が子女の教育に対し抱いている期待や目標を表現しており、同時に子どもも子女の記号を理解することを通し、子女を理解している。子女は父母の'記号'の教育を定義し理解した上で、自己の'記号'を運用し、父母と相互活動を行う、完成された家庭教育の過程である。」¹⁷⁾。保護者の世界観はどのように社会、人生をみるのか、どのように周囲の人と物をみているのか、どのように人生の道を選ぶのかに反映している。保護者の思想品性は日常生活の行為の規則を決定している。保護者の思想品性は保護者がどのような人であるかを反映している。そのため、保護者はどのように一連の記号（言語、動作）をうまく使うかが大切であると思われる。

保護者の文化素養は、家庭教育の実施と効果に影響を与えているもう1つの重要な要因である。保護者自身の素質はどうであろうか、親自身の資質、文化知識、道徳品性の修養及び子どもが受けた教育と教養、即ち保護者が精一杯設計する家庭教育の環境は、第一次集団にとって極めて重要な問題となる。子どもと父母は、どのように相互活動をするか、ど

のように相互影響を及ぼすのが、それを研究することも必要であると考えている。

②社会における「役割」の観点

「役割」理論は社会学の重要な理論の一つである。いわゆる社会的役割は、人の社会的地位と身分との相一致した系統立った権利、義務の行為様式である。それは特定の地位にある人々の行為に対する期待であり、社会的群体あるいは組織的基礎でもある。魏英敏氏の見解では「役割は非常に重要な社会学の概念であり、社会学によってはそれぞれ見解があり、各種の役割の理論の差異があるとしてもほとんど同じである。このように大体見解が一致するのは、役割というのは、社会生活の中の一定の社会地位において、一定の社会規範の活動の個体及び行動様式である。役割と地位は身分と密接なつながりを持っている。地位は役割の基礎であり、役割は地位の表現である。一定の地位にはそれに相応する役割を持っている。」¹⁸⁾

社会学の意義上での「役割」は社会的地位の動態的表現であり、それは人を取り巻く社会的地位の一連の権利と義務である。現在の核家族の増加により、家族の規模と機能にも変化が生じている。生活様式の変化の発生により、役割も「一人多職」へと変化している。

多くの親は知力の開発ばかりに専念して、父母は家族でも一種の「教師」の役割をも担うようになった。また、子どもの日常生活における能力の訓練や精神的教育に対して認識不足であり、自分のすべてを犠牲にすることを厭わず、子どもの生活について、あれこれと先回りして手を出してしまう。そのため、子どもたちは何もすることが無くなってしまう。親子関係は「主人と召使い」になり、特に母は「お手伝いさん」になっている。「一人っ子」の家族に、兄弟姉妹がなく、一緒に遊ぶ対象は父母であり、親は子どもの「友達」にもなっている。

③子どもの社会化の視点

森岡清美氏及び望月嵩氏は『新しい家族社会学』の中で、次のように指摘している。「このように動物として生まれた人間の子どもが、彼の所属する社会の行動様式、生活習慣を学習し、その社会の正規の成員に仕立て上げられる過程が社会化（socialization）と呼ばれる。」¹⁹⁾ 家族における社会化は、最も基礎的なものであり、人格の基底部を構成する重要な役割を担っている。「社会化は、個人が所属す

るさまざまな集団、すなわち、家族、近隣、遊び仲間、学校、職場などにおける人間関係を通じて、社会の成員として生きるための知識や技術、規範などの社会的価値を自己の内部に取り入れていく過程である。」²⁰⁾「社会化の過程は社会の規範や文化を教えこむ主体 (socializer) = 親と、それをを受けとめ、内在化する客体 (socializee) = 子との間の相互作用として展開される。」²¹⁾。社会化の過程をスムーズに展開するために欠くことができない2つの働きかけとは、母性原理の「慈しみ育む」という愛護、および父性原理の「鍛え導く」という訓練であると考えられる。

乳幼児から未成年までの子どもは、身体と心理の発育が未成熟で、人生の「生活依存期」に置かれている。これらの子どもが何を学び、その社会化をどのように実現させるかは、すべて成人の指導いかんにかかっている。この指導はつまり教育のことである。

家族は個人の社会化の過程において、最初の全局面を左右する作用を及ぼしており、教育は父母が子女の社会化に対し影響を及ぼしており、教育は、父母が子女の社会化に対し影響を及ぼす最も重要な様式の一つである。

個人の社会化に対する多面性が、家庭教育で完成されている。社会化は人の交流活動を通して実現するものである。したがって、個人は社会と不断の相互作用を行わなければならない。教育は個人の社会化の過程において決して欠かすことができない作用を及ぼしており、社会化の重要な手段がつまり学習である。家族は児童の社会化の第一の自然的な学校であり、子どもの出生後、父母はその社会化の最初の媒体であり、家族はそれが最初に社会化を受け入れる場所でもある。子どもはここで人と社会との交流について学び、人や物事に対する態度を取得し、そして処世の規範などについて学ぶのである。

VI. おわりに

本稿では、変化した中国社会的な諸条件のもとで、現代的な家庭教育について、基礎的、原理的に考察を進めてきた。

今日の多くの人は、家族、家庭教育及び家族生活についての数々の難題を益々理解しがたく感じている。家族生活及び家庭教育の変化に直面し、どのよ

うに家庭教育を理解するかについては、社会学の視点によれば、少なくとも三つの意味と要求が含まれていると考えられる。

第一には、家庭教育だけを論じるのではなく、全体社会と結びつけて、家庭教育を考察することである。そのことによって、我々は、中国社会の過去、現在、未来との関連で、家庭教育を正しく促えることができるようになるであろう。

第二には、社会学も確かに家庭教育にこのような具体的な観点を提供している。例えば、記号相互活動理論の観点、人の社会化の観点、社会の役割の観点、文化継承の観点、社会進展の観点、社会転換の観点、家庭生活論の観点等である。適切な観点を活用して、家庭教育に関する問題を深く分析することにより、今まで発見しにくい、或いは発見されなかった問題を発見する可能性がある。即ち、理論と実践を結び合わせるということである。

第三には、社会学の明らかな特徴の1つとして、その議論、結論が実証的根拠を持っていることである。すなわち、現実的根拠によって理論と実践を結び合わせるということである。独特の社会学の研究視点を持って、総合的、系統的な視点から分析を行うことを主張しており、特に、人類社会の多元性分析及び社会変化の過程の動態分析を重視する必要があると考える。

引用文献

- 1) 中共中央、国务院官房発行、2000、28号 (1頁)
- 2) 家庭教育学 彭立栄 江蘇教育出版社 1993. (29頁)
- 3) 新しい家族社会学 (改訂版) 森岡清美・望月嵩 共著 培風館 昭和62年. (3頁)
- 4) 前掲書 (4頁)
- 5) 家族は変革かそれとも続くか F・R・艾略特著 何世念等翻訳 中国人民大学出版社1992. (40頁)
- 6) 家族社会学の基本問題 飯田哲也 ミネルヴァ書房 1985. (159頁)
- 7) 家庭社会学 高樹貴 台湾黎明文化事業株式会社 1991. (22-25頁)
- 8) 家庭教育学 趙忠心 人民教育出版社 1994. (50-51頁)
- 9) 親職教育の基本観念の分析について 王連生 「師友月刊」1980. (62頁)

- 10) 家庭教育 山下俊郎 光生館 昭和60年 (9頁, 136頁)
- 11) 家庭教育学 彭立栄 江蘇教育出版社1993. (78-79頁)
- 12) 家庭教育学 趙忠心 人民教育出版社1994. (43-48頁)
- 13) 家族社会学の基本問題 飯田哲也 ミネルヴァ書房 1985. (30頁)
- 14) 趙忠心 前掲書 (97-136頁)
- 15) 趙忠心 前掲書 (97-98頁)
- 16) 社会学の視野から見た現代家庭教育「当代青年研究」 孫興春 南京大学出版社 1996. (47頁)
- 17) 孫興春 前掲書 (49頁)
- 18) 新倫理学教程 魏英敏主編 北京大学出版社 1993. (257頁)
- 19) 新しい家族社会学 (改訂版) 森岡清美・望月嵩 共著 培風館 昭和62年. (110頁)
- 20) 森岡清美・望月嵩 共著 前掲書 (111頁)
- 21) 森岡清美・望月嵩 共著 前掲書 (112頁)

謝辞：本研究は、2009年香港王寛成教育基金の支援を受けて行ったものである、心から感謝する。

附記

本稿は翁が執筆した『調和ある社会の中国家庭教育』をもとにして、中国の家庭教育について、日本と比較しながら日本語の論文にし、さらに考察を深めて修正加筆したものである。

本研究を進めるにあたり立命館大学の飯田哲也先生のご指導を得た。ここに記して感謝申し上げる。

(2010年5月10日受付)

(2010年7月21日受理)